

# アマゾン植民のポリティカル・エコロジー

## 「人新世」的状况に関する民族誌的記述／分析の試み

後藤健志（東京外国語大学）

レヴィ＝ストロースは『悲しき熱帯』で、「自由」を人口集団と彼らが占有できる空間およびに資源との客観的関係と定義したうえで、1つの文明史的尺度を提示する。彼は南アジアと熱帯アメリカをこの尺度の両極にすえ、前者に重ね合わされた西欧の未来の姿に危惧を寄せる一方、自由の行使と表徴の間の適合性が後者に残照として見出せることに慈しみを抱く（レヴィ＝ストロース 2001: 248-51）。南アジアでは、人口飽和による自由の危機が古くから経験され、カースト制を通じて、社会集団間に質的差異を創出し他者への自由の行使を放棄させる試み、つまり、「量」の問題を「質」へと置換する対処法が取られてきた。一方、西欧では、社会契約を通じて、市場経済の枠内で自由が制度化されると同時に、地域外部への植民を通じて自由獲得の不平等を量的に調整する技術が発達した。

発表者の調査地とは、ブラジル・アマゾンの一部をなすマト・グロッソ州、すなわち、レヴィ＝ストロースが駄獣を引き連れて彷徨った「セルタウン」のおよそ一世紀後の世界である。今日、この地域は、西欧由来の植民技術、すなわち市場経済への包摂を通じた自由の獲得技法が、外部から流入した植民者たちの手によって適用され、後背地に向けた社会的世界の膨張が未曾有の速度で進展していく地平に置かれている。

本発表では、アマゾン植民のポリティカル・エコロジーを「人新世」（Anthropocene）の概念を手掛かりに記述／分析する試みについて検討する。新たな地質年代の到来を宣告するこの標語は、自然科学の側からは、自然環境における「人間」のプレゼンスの昇格を、一方、人類学を中心に推進されてきた「存在論的転回」をめぐる思潮の側からは、人文社会科学的な前提として「自然」から特権的に峻別された「人間」の降格を、それぞれが志向するかたちで参照されてきた（Orr et al. 2015: 162）。つまり、この標語を媒介に、広範な学問領域では、「自然」と「人間」という従来の二元論の相対化が進められてきた。

「存在論的転回」以降の人類学では、人間と自然の境界域の曖昧性をレトリカルに描き出すことで、ポスト・ヒューマニズム的な一元論が提唱されてきた。しかし、安易な二元論の相対化とは、つまるところ、人間中心主義への回帰、そして、市場経済主導による技術至上主義的な自然搾取への黙認と同義であると言わざるをえない現状がある（Foster 2016: 398）。一方、発表者が、人新世的状况を捉える際に問題化すべきと考えるのは、自然と人間の境界域の解体が観察される実際の現象下において、ある特定の物質の流動と移転

を引き起こし、広域的な生態系に斉一的な破壊や改変をもたらす要因を、いかにエンピリカルに探究することができるのかという点である。

この点は、発表者がアマゾン植民の事例を通じてポリティカル・エコロジーという問題を提起しようとする主眼と結びつく。文化生態学に対置されるこの概念は、政治経済と自然環境の相互作用の分析を通じて、ミクロに完結した地域共同体や静的で均衡の取れた自然といった幻想を解体し、自然と人間が常に相互干渉的に非均衡を生み出してきたのかを明らかにしてきた（Blailie 1985; Scoones 1999）。つまり、ミクロ・スケールの恣意的操作の下で環境への適応を前提とする生態人類学にも、非西洋の他者のコスモロジーへと埋没していく認知人類学的な環境論にも還元されることなく、人類学が「文化」を通じて探究してきた「複合的全体性」について政治経済との関連から考察することが可能となる。

アマゾン植民者たちが適用するフロンティア資本主義とは、①土地の占有と温帯的生産様式の適用を通じた生態資源の抽出、②占有地に対する私的所有権の疑似的創出と異なる職能性向を備えた当事者間での土地取引、そして、③さらなる土地の占有と資源抽出という実践のループからなる。熱帯土壌の不毛と生産力の非持続性という制約を新開地の連続的編入と疎放利用にもとづく規模の経済によって埋め合わせる実践に植民者たちを駆り立てているのは、外部市場によってもたらされる「食肉」への需要である。そこでは、あらゆる当事者間で資本主義的な差異が追求され、商品へとつくり替えられた自然が交換価値を媒介に取引されている。市場経済への適応が物質循環の攪乱を生み、自然の側が資本主義の規則に適応するように造り替えられていく営みが絶え間なく繰り返されていく状況こそが、アマゾン植民を通じて人類が直面している人新世の経験である。

Blailie, P. M. 1985. *Political Ecology of Soil Erosion in Developing Society*. Longman.

Foster, J. B. 2016. Marxism in the Anthropocene: Dialectical Rifts on the Left. *International Critical Thought* 6 (3): 393–421.

レヴィ＝ストロース, C. 2001 (1955). 『悲しき熱帯 I』中央公論社.

Orr, Y. et al. 2015. Environmental Anthropology: Systemic Perspectives. *Annual Review of Anthropology*. 44: 153–68.

Scoones I. 1999. New Ecology and the Social Sciences: What Prospects for a Fruitful Engagement? *Annual Review of Anthropology*. 28:479–507.

キーワード：アマゾン植民、ポリティカル・エコロジー、人新世、政治経済、資本主義